



十福為桑村
208

5
2235
3



新
2235
巻

新入
書
目
録

十論の辨別

才八段

終
書

渡部 ね編

中身以上 擧ぐるに中身以上とて或は武家の
人くといひ或はち宗家徳道の人とて一々
ゆきゆきの体といひあかぬとてさういふ
をいふにわづらひけりけりけりけりけり
さりと町人百姓とていふ宗家のまじり
宗家とてさういふに面くの實加ちらに
ちしとてさういふに指しおとの爪とかけ
鐙の柄とてさういふに和宗連系にさう
て身玉の久遠のそとに言りのそとに

八

これと孔子も書来記し説のい興放詩立放
礼成放樂民可使由之不可使知之
よふあけい禁中し和斉の連音のしと裡世卒のめ
はしりてふ家殿上のはとちあれの僧家し朝交を
暮音誦のこしく衣冠とあしちれ後とさきて天中
地祇とやうけむとやまうい和斉もさほもさ
太事の新あれい庶民のあめとさるむにさう
おとあいつ子游うささし孫子の美牛うりへさ
ちしてさえ舞のに美とささうりひあつさ
行つ之と由之とと脩己以敬さうよ子道のんれ
信しはありけりけ辯の大略い先後あし論あり
民由の章れ子曰と衍文さうと由之とい前の詩れ

中
中以下 遺稿夜話にある日本曾寺の茶話
し故為のさうい人ありけ併借とさうい何のあれ
向むむに俗談茶話とさういありとさういさ
うらのさうい道のたきとさういれい儒のの寂然
不動とさうい作家の寂滅あるとさういむい併語の
さういあつさうい道と中以下しれとさうい
中以下しの風雅と道さうい教するも老叡の死
とさうい阿含し人とさういあいのさうい内秘外教の
はあつらんやむと孔子のゆゆをせはのさうい用
といれあむむと下学而上達知我者其天乎

世に但溺るるを非ざるありて我の人と
世ともさげさるる善習善徳の日用ありて
童子部も下学して成れと王道の上達と
ありといはれん然るを我氏のやめるの因
もさるるに老子の履舟の言を奉りて
孔内よけ世にあれば論語の言行と鑑
いれぬの履舟の言を奉りて表裏と
とらぬるの道とありてしむられし柳下惠
と子の人の言を講と神とせりい道と
を地ふんとて我の言を奉りてす
神もさるる言を奉りてす
の言を奉りてす

修己の修己の道の才一は後
ありらるるに修己の言を奉りてす
いありらるるに修己の言を奉りてす
ありらるるに修己の言を奉りてす
の言を奉りてす
もさるる言を奉りてす
て其の言を奉りてす
我の言を奉りてす
洛陽の言を奉りてす
ありらるるに修己の言を奉りてす
とありらるるに修己の言を奉りてす
京の言を奉りてす

丁大振のからしむれどもやるるにひまのからしむ
のむつしむる句も入削の似而非あんけねし
おまの人ありてんのをそととばひはくし
柔あとも能く今日の平はあつとま
けりしそく落押舎の講中とありて著者の名
録入し

作意 遺稿類説より名付か人の西村兼庵より
續徳女表の撰集ありしに武塔のくくより
春句とらるれりし中より其角もその春ありて
秋風辞と裁へる句に
いしそよと舞も人の感ありしは
及かくまふとそなる例のちあふる

けりし能くさげの玉振金取の作とりて
天下の人と舞のさむしそよよりみ春の暮化と
たうしそよ二作とめらるる事とまはしと作は
かたは能くさげの玉振金取の作とりて
とめらるる事とまはしと作は
ちとてはくおくの作とめらるる

三作 けりし能くさげの玉振金取の作とりて
三作 懺のち者のさるる牡丹
けりし能くさげの玉振金取の作とりて
春句とあけり曲節の備あり早き意のさるる
ちとてはくおくの作とめらるる
雅俗 雅俗よの意の証あり或は頼政の平也

詩よ哀を飛して画して作ありなれと意の
雅俗といひ或を肥て累なる一と上篇の
いづる俗語ありに瘦て清くけありと雅言
ありなれと詞の雅俗といふ十段の辨は吾人に

傳曰

吾人多語 按るに文語の二より十篇一部の
大より小なりと云ふ細く儒者も仰るもあやむらふ
いふはしるも實とて一記して是と云ふを
をありきと云ふ黄金の用は似て是と云ふ人と
て是と云ふと云ふ人と云ふと云ふと云ふと
認るるよといひ也云ふに今の文語といふ人
の多るを天地に通る愚人の多るを云ふといふ

えきく天理と人理といふ一歩の好悪あるあり
澤しけ二子の大ゆちり録るも多し賜とくも
辨るも多し中と云く一はけ段のあやむら
いふ文語の始誅し仲由向日君子禍至不懼福
至不喜今夫子得位而喜何也云孔子の答
い今の詞あり卷末の解はつる一はけ仲由い
虚々の文と云ふも顔色の喜怒といふは
に孔子は削の隠さるるもよく是時の心と云ふ
めりらるる論語の述而の篇は二の子以我為
隠手吾無隱乎爾吾無行而不與ニ子
者是丘也云先後抄はより論語の語者達
へ道は無隠といふは二高のるあり

一子相傳の秘了もあん孔子の道と云うて天
何と云ふは、一をじやうして是丘の詔使と云はれ
へ論語の文章と圖の所もあんは、二子
と云ふは、地と云ふは、一は詔の相傳の
を位と云ふは、一は詔の相傳の
れんかあ、七虎の喜怒哀楽も何と云ふは、
のかりあんなれと云ふは、一は詔の相傳の
眼横鼻直ちりや、一は詔の相傳の
和漢の漢方の論語も論語は、一は詔の相傳の
あう人よむい、一は詔の相傳の
かう一子を教ふか、一は詔の相傳の
ううたれと云ふは、一は詔の相傳の

意と謂ふは、一は詔の相傳の
孔子と云ふは、一は詔の相傳の
と云ふは、一は詔の相傳の
之をみ希い、一は詔の相傳の
是丘の自慢と云ふは、一は詔の相傳の
て女子、一は詔の相傳の
則然と云ふは、一は詔の相傳の
の急用と云ふは、一は詔の相傳の
あま、一は詔の相傳の
朱徑、一は詔の相傳の
有、一は詔の相傳の
あま、一は詔の相傳の

夫子はわづらひて、
不孫なるをよこすの振のうらたを、
かひての歎息あり、
好む播盤の、
終る仰、
おと、
い、
は、
あ、
天、
の

の餅と、
七、
言行、
世、
は、
の、
元、
さ、
の、
さ、
の

る

七

の要は名よきなりて史記一記諷諭の妙懐と失つて
世のそとにありて放逸の人にて終の爲にさる
抱くしやいふはれいふはれいふはれいふはれいふはれ
もはれいふはれいふはれいふはれいふはれいふはれ
の兄弟とありてはれいふはれいふはれいふはれいふはれ
の詞いふはれいふはれいふはれいふはれいふはれ
いふはれいふはれいふはれいふはれいふはれいふはれ
仰の人の賜とありて詩歌の人の此勝とくくくく
淮陰侯の勇力氣力なりて孟之及の敵なるいふはれ
をことおまのさ地なりて道くの建をいふはれ
はれいふはれいふはれいふはれいふはれいふはれ

抱く天倫の次才ありて詩歌連絶とありて
詩書と詩歌の風論なりて連絶と詩歌
の徳なりて及なりていふはれいふはれいふはれ
往より及なりていふはれいふはれいふはれ
とされいふはれいふはれいふはれいふはれ
力の意の詔ありていふはれいふはれいふはれ
いふはれいふはれいふはれいふはれいふはれ
過行の意ありていふはれいふはれいふはれ
なりて愚先の詔ありていふはれいふはれ
徳文といふはれいふはれいふはれいふはれ
の徳文とありていふはれいふはれいふはれ
孔子もけ行とありていふはれいふはれ

孔子もけ行とありていふはれいふはれ

則不孫儉則固

きつらてふない近くんちやうたああり中とや教する
のみよきし若巖孫と中よりうへ所言はをと
ふねこころりんまや源氏のち平帳し復た巻
と中よりち平桐壺雲隈とあねいはらうの復
転向とえうへ句作を後あらうとまらへとを
減し今の能活解り転向へ句作とのけいといとを
とゆへへ句のつとといふ句の用とよ差ふ
ありへ昇臺とらるるをて理窟との説をれと
孩よ水仲の命とてあねまよとちりへとちりへ
かへへ自己の権柄の権柄あふうと世向のくは
るのうへへ句のうへへ句のうへへ句のうへへ句
ふしげよあらむうへへ句のうへへ句のうへへ句
ふしげよあらむうへへ句のうへへ句のうへへ句

とらふてふへへ句のうへへ句のうへへ句のうへへ句
ふくあへへ句のうへへ句のうへへ句のうへへ句
のうへへ句のうへへ句のうへへ句のうへへ句
のうへへ句のうへへ句のうへへ句のうへへ句
論語の多識といへへ句のうへへ句のうへへ句
文とてらへへ句のうへへ句のうへへ句のうへへ句
もそのうへへ句のうへへ句のうへへ句のうへへ句
のうへへ句のうへへ句のうへへ句のうへへ句
神のうへへ句のうへへ句のうへへ句のうへへ句
とてらへへ句のうへへ句のうへへ句のうへへ句
まらへへ句のうへへ句のうへへ句のうへへ句
あへへ句のうへへ句のうへへ句のうへへ句

あへへ句のうへへ句のうへへ句のうへへ句

ありはらうとてのふりてりになるのうり我
と能くしあるのうりてりてりてりてり
所存とすありてりてりてりてりてり
それと随類得解といひて枝縁の時ありてり
法一といひてりてりてりてりてり
とてりてりてりてりてりてりてり
悟易迷難といひてりてりてりてり
附合といひてりてりてりてりてり
とてりてりてりてりてりてり
やあるのうりてりてりてりてり
てりてりてりてりてりてり
とてりてりてりてりてりてり

と耻下といひてりてりてりてり
五老井にあるといひてりてり
かられりてりてりてりてり
はれりてりてりてりてり
みえりてりてりてりてり
きあるの遊辭あるといひてり
よりてりてりてりてり
差ふといひてりてりてり
即家縁のうりてりてり
てりてりてりてりてり
てりてりてりてりてり
てりてりてりてりてり

五老井

五老井

あゝ降るらばあはれとせむらふあふのひを
 らふあふらばあはれとせむらふあふのひを
 一字におとほあまゝの趣向し句外もかゝる
 ちや衣裳のあまゝのあまゝのあまゝのあまゝ
 せのらけ類のあまゝのあまゝのあまゝのあまゝ
 水と乳きいてこあまゝのあまゝのあまゝのあまゝ
 知れ枝袖と乳きいてこあまゝのあまゝのあまゝのあまゝ
 月むつうく服らあまゝのあまゝのあまゝのあまゝ
 む衣裳のあまゝのあまゝのあまゝのあまゝのあまゝ
 あああにららあまゝのあまゝのあまゝのあまゝのあまゝ
 句とゆきあまゝのあまゝのあまゝのあまゝのあまゝ

わゝ人妻の母親の趣向をあらの中よなあつて
 句作らあらあまゝのあまゝのあまゝのあまゝのあまゝ
 何とせあらあまゝのあまゝのあまゝのあまゝのあまゝ
 まゝあまゝのあまゝのあまゝのあまゝのあまゝのあまゝ
 句とゆきあまゝのあまゝのあまゝのあまゝのあまゝ

知程に二字を五字の日用のしゆけりい知定と
 しの備けしる知量しよわ片端の離附の二記
 けらあゝあゝの程とせむらふあふのひを
 鯉のけらに鯛の漬焼しはまゝのあまゝのあまゝのあまゝ
 やゝゝのあまゝのあまゝのあまゝのあまゝのあまゝ
 けらあゝあゝの程とせむらふあふのひを
 一句も重なりよのしゆけりい知定と

一、二汁を鮠の鱗にまきよるに類するに丹
 もゆふの非も曲解とせらばけの撰おつて
 越向のくまらりくめくもくもく二の書は
 能諧明暗 祥林隨喜にある和尙の坐禪の時、野
 狐の妖怪とあらはれ一唱とり、蛇のあはれ消失
 たりと其のあはれく典座とあらやると、倒
 の一唱とり、ちねん狐のくまらりくもくもく
 ちねん一唱とり、あま一唱とり、用いあめり
 ねん一唱とり、狐をふふあま一唱とり、あまの徹と
 事徹ありまらぬ風折とまらぬ、甲一唱とり、徹と
 て、あまらりくもくもく、和尙の一唱とり、徹と
 く、く、く、典座の一唱とり、あま一唱とり、人とら

ん地あるにねん、能諧の信も信とまら
 之名 遺稿、夜話よ、之、祿のた、ち、奥おの、おり、
 高れね、系と撰、一、湖南より、武、い、ま、
 ね、の、返、書、よ、文、書、の、例、あ、ら、い、く、
 も、見、書、も、あ、く、い、な、れ、し、他、人、の、能、論、の、め、ら、
 い、自、己、の、能、用、の、確、も、い、も、無、ん、に、書、と、い、
 起、括、あり、走、と、い、倒、の、括、子、あり、今、さ、ら、別、名、と
 あ、ら、な、あ、一、か、て、整、と、い、あ、ら、い、の、約、う、百、句
 あり、二、句、の、向、一、の、れ、と、わ、き、う、の、金、た、い、
 能、諧、よ、い、あ、あ、い、い、な、れ、と、一、の、れ、と、あ、ら、
 所、余、の、も、不、會、ぬ、よ、ま、ま、い、の、難、け、の、あ、ら、
 自、己、の、先、作、と、い、あ、ら、い、今、あ、ら、書、よ、の、二、又

善く二種の心と心とをいひていふ所の善の可入加
もあつたやうにせよは善い故に故にのほはあれは善い
よと信じてとまらねばならぬ刑のやと罪ゆゑも
一とありけおいふくお子庵よとてとて世の
内人の忠誠さへてを洋にけ後話の腐言と
ありて説きといふ所の用あはれお子とを親
のちいふもあつたやうにあつたやうにけのるとさ
て他人の能福と自己の能福とに教師の能福
と臨終をいふとや親善の能力いふもあつたや
發句信 教師の常談よお句のよへ結もあつた
所句の變化よ自在ちりよふぬ善の在りよ十倍あ
むらりといふ下のふとくも古来の信よとてり

て誹謗の理居の善からいふぬあつたといふれ
善とてあつたよといふ人もあつたやうにせよは
善いといふるお善の在りよは信じていふていふ
情と夫つりともあつたやうにあつたやうに信
あつたよといふとていふもあつたやうに信
ちる善達よりいふ今の變化の善やうあつたやう
言ふ能信の時信頼ちるとまらぬとていふもあつた
善いといふれあつたやうに信の能信もあつたやうに
月電もあつたやうに信の能信もあつたやうに信
も信とていふに信もあつたやうに信の能信もあつた
今の信ちりよふとていふとていふに信ちりよふと
の善の信のちりよふとていふとていふに信ちりよふと

善いといふ

善いといふ

とあり神皇の同とあり十の言を藤の書物よ
おありなる所の神のまのさめのかゝりよりい
ゆる一上子の者句の邪にありていふも
まゝ今の世ありていふかゝるも人のせうもこれ
詞の神皇とあるのや上子の御上論に及ん
たしく各句の空を指してはけいし虚言の實
あるはらるる風世の思をうけるやよみお句の
天下とまゝの山けりし所句の上より千葉百化
の長とありて揚し虚言の虚とありていふは
けりともあふと各句も所句も上よあふと
ありていふかゝるの言も有るの虚といふは自然
の位ありていふと天卒の改定といふはこれ

けりともあふとありて七十一才のやけおれこれ
と我於^ニ辞命^ニ則^ニ不能^クとてかくを指しはま
のあらひをけりていふとありて各句も
一やよ一やよありていふとありていふとあり
くありていふとありていふとありていふとあり
けりともあふとありていふとありていふとあり
とありていふとありていふとありていふとあり
ありていふとありていふとありていふとあり
堀朝のまゝとありていふとありていふとあり
はれともあふとありていふとありていふとあり
さうして林とていふとありていふとありていふとあり
の月と寂實のまゝとありていふとありていふとあり

かたは人とおぼゆるべきものなりとて、
飄々たる人となすは、
も亦産むるも、
乃らあやむと下のみよきあり、
のさうらあやむとあやむるは、
と信じて、
さくまくとあやむるも、
さいく、
一、
そ、
干あうり、
の作あ達、

書く趣むも、
さうとさう、
一、
るも、
歳見、
の判、
中念趣向、
か減あり、
い、
つ、
人の、
うい、

却破して神意の軌向よりきくようとするか
分ふの閑と透ねる

一 夜調子 接ぎりに天地の運行より人の力帯の
浮沈もろ流らるりて世の上もよももさき會て
い物の振子あねの附向も二様の運連とるをま
一 流雲をらまらるるれりともあねも場の人を
あつむりよらるるし 初なる寶せしよの
一 一 速行の夜流よもよのあつむるれり
向し附向も二様の調子とるをま一 池のちよれ
よついでまらるる向し耳は徹きよこれく
露子のちよらるるよ一 穀とん棧指の意也

傳曰

東西二名 接ぎりに此段を張子季文論よりして
始終の用よりあつむるれり 以雅の始終の二と
りりかの文教の用あねいとえ祿中の竹福より
けりよの以書ありけりも福の大略とるえ神の
新鑄古文は事とありて張子季文の銘道
始中換のことけりて西の乾坤の二體とるは
東の厭言厭動といよりむさるる心性の
ゆたのまらるる以雅の文といひかてけりも
崇依り子と文といひて禹王の孝といひて
父のふといひ昔酒の二まといひて文の可し用の
用あねあり曾参も孝のけりまらるる歸全
者曾参也 頃令者伯奇也 けりあつむるれり

の

行

書一とこれとの間の親切とやうな、
つらつと文のよみはあり、
一子も古文の利ありあらう、
おとなく文の用ありて、
さあり、
子、
カ、
あ、
と、
い、
能、
よ、

拍

あへ口の拍子よ、
とある、
い、
能、
よ、

舞向より、
酒食の雑話、
一とせ、
草の、
こ、
ま、
筆、
い、
と、
詞、
と、
は、

居吾語女好仁不好學其蔽也愚好知
 不好學其蔽也蕩好信不好學其蔽也
 賊抄云仁知信之三言者儒書云佛經云
 教誡之常也則不及之為誡要歟
 好直不好學其蔽也絞好勇不好學其
 蔽也亂好剛不好學其蔽也狂抄云直勇
 剛之之言
者此章之要文也左有者六所有好學之二字而可見
 子路一人之誠厚諸語者先仁知信而後直勇剛了則
 昨日之子游麼今日之子路麼成不替寺之談美
 而何以可分儒仙皇矣哉等可知論語之先後也
 小子何莫學夫子詩抄云此限者全續前章而尤
 之二字者為行文平手小子者指子路詞而亦語余
 麼如小子語之言則親切之平語也乎然則從公山弗擾
 至此章這者下同一篇之文勢也

詩可以興○朱曰感發志氣也抄云朱註者非詩經之
 之法說也美與者詩之比興也詩者徒志之所之而可乘興而
 遊也其詩者朱氏麼為註止乎五字六義之賦比興或
 可觀○朱曰夫見得失也抄云朱註非詩經之用謂塵劫
 記之詳矣觀與者觀感也心見曰觀凡推者屢對
 在花草草木而可觀念也季之變感懷万物之化與所朱氏
 者自以觀感之二字為令註論語之政刑止乎今惟為云或如何
 厥者不案其人之用字
 面之註者與者此謂也
 可以群○朱曰和不流也抄云不和與者詩經之註也
 可以怨○朱曰怨而不怒也抄云朱註麼至此段之不怒而見事
 氣出矣乎之尾云非例之可蓋梅取是者謂斥詩經
 真論語者也孰能有不怒之意耶這以麼可悔者本朝流布
 之論語而朱喜集註之與凡雅也其也與者詞之哀動也抑曰

以雅之大事乃者却詩麼以一言而盡之與此歌麻公一首漢
 無遺方然情了則天地麼動之鬼神麼哀之增而神佛之
 正直也了教不成焉之二葉何麼然則不憐給正耶焉書
 于傳年物然止麼不所謂今之哀動耶是故詩麼歌麼知可
 吟然道理了哉在則子麼有北意而所謂舜者有
 然莫不則未註者則之不知然心之矣則然已意親與者
 其親之意也然之二字者在孰國而麼互竟無居事也
 者免今麼角今麼虛實之不自在也其初謂地之平
 竟者教觀然之哀而所和給武土之心可案其日其之
 用詩者好蹟然孔子之筆刪而將仰風雅之大理麼是也
 通之事以父之遠之事君
 例之不及言無舉重之二字有也麼有果今也言北段之用則
 通遠之二字有無用之用而論語者將詳文於先社可謂
 論語之註者自出了尤在共兩處知有之字不通復
 語程者分明難言假令言其推量之物也其不次
 多識於鳥獸草木之名
 多識於鳥獸草木之名
 多識於鳥獸草木之名
 多識於鳥獸草木之名

註之先後乎詩身者才二竟花鳥之名而樂而可觀哀而
 可然厚學字文者所覺道之猶鮮也正或時者勸曾子有
 子而宜結直道則學文古此時者儻子路一人而行之交
 麼巍元也則宜結先覺花鳥之名也作詩書文博好子向歷
 况見家語之好生了則稱詩雅之圖雖與席鳴而若鳥獸
 之名類之固不可行與者有如未公室字者而欲破詩之優
 故故小言當道進遺經此誠居吳何推者拾物之本而自者錄
 知之末也則于月于雲于花于鳥不家四本之優情猿哉矣知
 今日之孔子愛知今日之子路則今日論語之註者哉矣
 論語者可不視之觀之愛之矣耶蓋多字者此大有之
 義而或謂適也
 第十段
 聖典旋 子孟子曰舜由仁美行非行仁美之大道
 以之仁美之大道

てとんと仁義とされ奉りしつるに其義のやうに
とちりてはとがまふらんあむしたるはむふ人そ
りありけれは先後およ由と行の差のあらはれ
おの下に全文とくらへてあるは末の世に政の上
の費と下にたぐあひ下と一金の賂とて百金の
上とがまふとてあむらん民のりをたをま
へよとくに大道廢有にまはつらん世に
なり頭今と同じまはつらん耳にたをま
ぬらん一内は儒宗のたんとをまふらん武の
厲言とてあむらん天子のまはつらん民とあむらん
かく様同し西と東とて民はたをまふらん
あむらん孔子の刑解し繩之以刑是謂為

民設^レ刑^ト而^レ陷^ト之^ト今^レも^レ鄭^ノ子^ノ意^ヲ
實^ニ政^ノ極^ニ政^ノの^レま^ニ言^ハふ^レん^レお^レも^レた^レぬ^レらん
され^レは^レ亂^レ世^ノの^レ世^ノ代^ノち^ノ然^ル中^ニは^レ此^ノ言^ヲと^レ言^ハれ^レん
せ^レく^レは^レる^レの^レ言^ハれ^レん^レと^レあ^レら^レぬ^レらん^レも^レ代^ノ此^ノ
物^ノと^レて^レも^レ本^ノと^レあ^レん^レ昔^ノ時^ノよ^レら^レある^レも^レ近^ノ遠^ノ
を^レた^レの^レけ^レ式^ノの^レと^レく^レ世界^ノの^レ亂^レ世^ノと^レあ^レら^レぬ^レらん^レ一
は^レ式^ノの^レる^レた^レと^レあ^レぬ^レらん^レ其^ノ意^ヲを^レま^ニて^レは^レる^レ論^ノち^ノり
今^レ覺^レ古^ノ明^ノ 按^レま^レり^レた^レけ^レ殿^ノと^レい^ハふ^レらん^レた^レち^ノを^レた^レり^レま^ニ
る^レ不^レあ^レり^レ今^レ覺^レと^レあ^レら^レぬ^レらん^レ辨^ノや^レと^レく^レ古^ノ明^ノ
は^レる^レ辨^ノか^レら^レは^レる^レ一^レ文^ノを^レ通^スの^レ人^ノと^レて^レ書^キ
一^レ物^ノと^レあ^レる^レ時^ノは^レ一^レ切^ノ物^ノと^レて^レ暗^クい^ハふ^レらん^レ古^ノ明^ノと^レて^レ書^キ
は^レる^レ神^ノ考^ノの^レ頭^ノと^レい^ハふ^レらん^レ一^レ物^ノと^レて^レ書^キ

神考

神考

とつりも五運變化のるにあらざる即ち一なりて
終句よりなると云々と云ふも昔も傳格と格
の字も此と云ふも終句よりなると云ふも終句
と終句よりなると云ふも終句よりなると云ふも

私云え福中の竹符より才とのも此の如く
下に日向月の輝き何故よと云ふも十て子の
係ちあり例のちけられられけられの板
ちさも梅さるん起を指合と終句の新式
あゝねと何故よと云ふも此の如く
及これ例の法およと云ふもと終句の如く
つりも終句よりなると云ふも終句よりなると云ふも
と終句よりなると云ふも終句よりなると云ふも

と一比較をいふと終句と終句と終句と終句と
終句と終句と終句と終句と終句と終句と
の字も此と云ふも終句よりなると云ふも終句よりなると云ふも
起を轉合と云ふも終句よりなると云ふも終句よりなると云ふも
終句の式同と云ふも終句よりなると云ふも終句よりなると云ふも
の字も此と云ふも終句よりなると云ふも終句よりなると云ふも
後勸と云ふも終句よりなると云ふも終句よりなると云ふも

▲哉のり来のり梅よりなけりてと云ふ大和詞と守訓
ありて哉のり多用あり終句の二美と云ふも
終句と終句とに差ふあり余韻傳終句と終句と通
用あり見永傳和音の終句も終句のありて
永言の意ありと云ふも終句よりなると云ふも終句よりなると云ふも

の大むねちりり或は玄妙切といひ或は大方といふ
おの知るべしといふは成り一傳或は成り切もかま
るも右式十二二の之同あれ一神家の格といふの
字もこのかきり一傳かまらぬといふは漢一
哉と哉といふ通用して一様歎と二美といふは
哉字の二名又用して一傳畢竟は咏嘆の集部と
あるといふ或は之段切もこの字切も右切の神とい
ふかきり一傳或は雜の者句といひ或は中一の格
といひ一傳或は季の格といふは自字の成り新
格といふ一傳東を式といふは文ありけりかきり
遠見より月花のあつひらけりかきり一傳
金條の設あれといふは幸論の畢竟は千式

凡此も一現あれといふはとされし也

返心 白馬教誡訓一神家の大なり世法も返心の
二字あるといふは一傳一傳れといふは書いふは遠き
といひ仰せりて機嫌といひ能く合致といふ
きといふ傳はの大なりといふは此の格といふは
世法のを用ふといふは能く合致といふは
むより和漢の博字も返心の二字といふは
とや仰せりといふは表といふは今より一傳の
裏といふはとあるもはれといふはとあるも
とを博くといふはとあるもはれといふは
字も和漢といふは備法といふは思則思
思而不思則始といふは思則思

白馬

九

とありし或と軍備の俗語とありしに
も及び上よあれども減なり
かまらば彼より一帯の上よあれども
哲の能とあけて其も及ばざらん
いかにわたり何れも及ばざらん
るに類回信而不能
路勇而不能怯子張在而不能同
之有以目其吾弗與也此其所以事吾而弗敢
也
一帯の能とあけて其も及ばざらん
いかにわたり何れも及ばざらん
るに類回信而不能
路勇而不能怯子張在而不能同
之有以目其吾弗與也此其所以事吾而弗敢
也

例、
一帯の能とあけて其も及ばざらん
いかにわたり何れも及ばざらん
るに類回信而不能
路勇而不能怯子張在而不能同
之有以目其吾弗與也此其所以事吾而弗敢
也

一帯の能とあけて其も及ばざらん

いかにわたり何れも及ばざらん

教化秘す 白馬教誡訓を以て儒仲の教と
しん内秘外理の三相ありて新出孔子も虚
多くと名あうをばた虚すてとよと言ふあり
一乃のそ地と説のいひや今と言語の類い
てたれを空しくいふすふりおよまはしく
かゝ虚ても實てもあらずしむとて悟る我
はともいふありやん儒仲の二カ卷一人と作ら
ざるもあを人と迷はざるあれおこと業
明瞭とてつりたれし新出孔子の智慧ある
守んもも嘯は信んてんことさし子疑一決の
あしんあた教化の秘すことあをくす人の
ありく教のんを無通せし方あしんをばた人の

ちるしあは迷わしゆるとた悟るは悟ては
と放下とまうし例にまのそいひて例の
と知るる一とをむし大梅の常禪解とす
即ん即佛の言下にゆとりて非心非佛の釣語
すしりて這老漢惑亂人未有了目とて
の馬祖と老毫とりのし即んもあも非心
あしと虚ても實てもあらずし馬祖の四
句と看破とあり所近もはまを此の
あれ梅子熟きりしちち花のあうけ
能浩一乃のそ地とてはる連歌の風流
月よりあをく花はあしんこと
とまはしんて十持のほたす及る

白馬教誡訓

九

負字式のゆゑにこれをあげてひらくに新の差
ふと辨とて去嫌とてふ象物のれうて竹本
もる歎いつたうなるて然賦食服のれうは
よの辨用の差ふあり支射よの詞の野命あり
或とて名取物各よ同字別吟の取らるべき
準格の二より転向し句作との差ふとてけり用
と不用とのる段とけりて一四式のてく文を
とふむへうとてきとて一梅樞一柳腰のこも地嗣
の牛よの鹿馬のこもて居所よ全筆の家名
のこもてとてきとてい打懸もも人よとてけり
て用控も一とてけり二句のてけりてとてけり
たふとてとてけりてとてけりてとてけり

とも鹿馬とてけるのゆゑにとももた格削
りて転向し用あはし句作の用あはしと
とてけり一指合とてけりてとてけり
してとてけりての清濁とてけりてとてけり
たあり数字よ送字も四式より轉一とてけり
一とてけりてとてけりてとてけりてとてけり
へ二句のてけりてとてけりてとてけり
物名も餘座よ座のこもてけりてとてけり
偏く語の字形とてけりてとてけり
あつて附向も打懸も用控の詞あつてとてけり
もとてけりてとてけりてとてけり
とてけりてとてけりてとてけり

あつて

此

ことごとく同字同義の誤り一松風は風名
 のことごとく旧式より同字別義ありはれがらき
 と假名はかくら執子のたさきと一子あり
 畢竟たは式めるとあり二巻の書は紙
 あり諸路の拍子とある針と指合も去婦も
 して新記のはたあつたてを理とすとの
 あんけのたけ論との眼の所とえりてそ
 子のいそんはたあやまのあかんがれ
 海とあはくまるとあるとこれよあは
 いそいでまゐるといふ

二見文世金圖

鏡板

長一尺九寸五分
 横一尺一寸
 厚四分五厘

板足

高一寸五分
 横一尺六分
 厚四分五厘

足、ひきこ

十口埋木ハホコ形ニ
 但ヒラ共ニ九メテ
 十口ヨリ
 見付ヨリ
 横一尺六分
 長八寸五分
 中程
 厚四分五厘

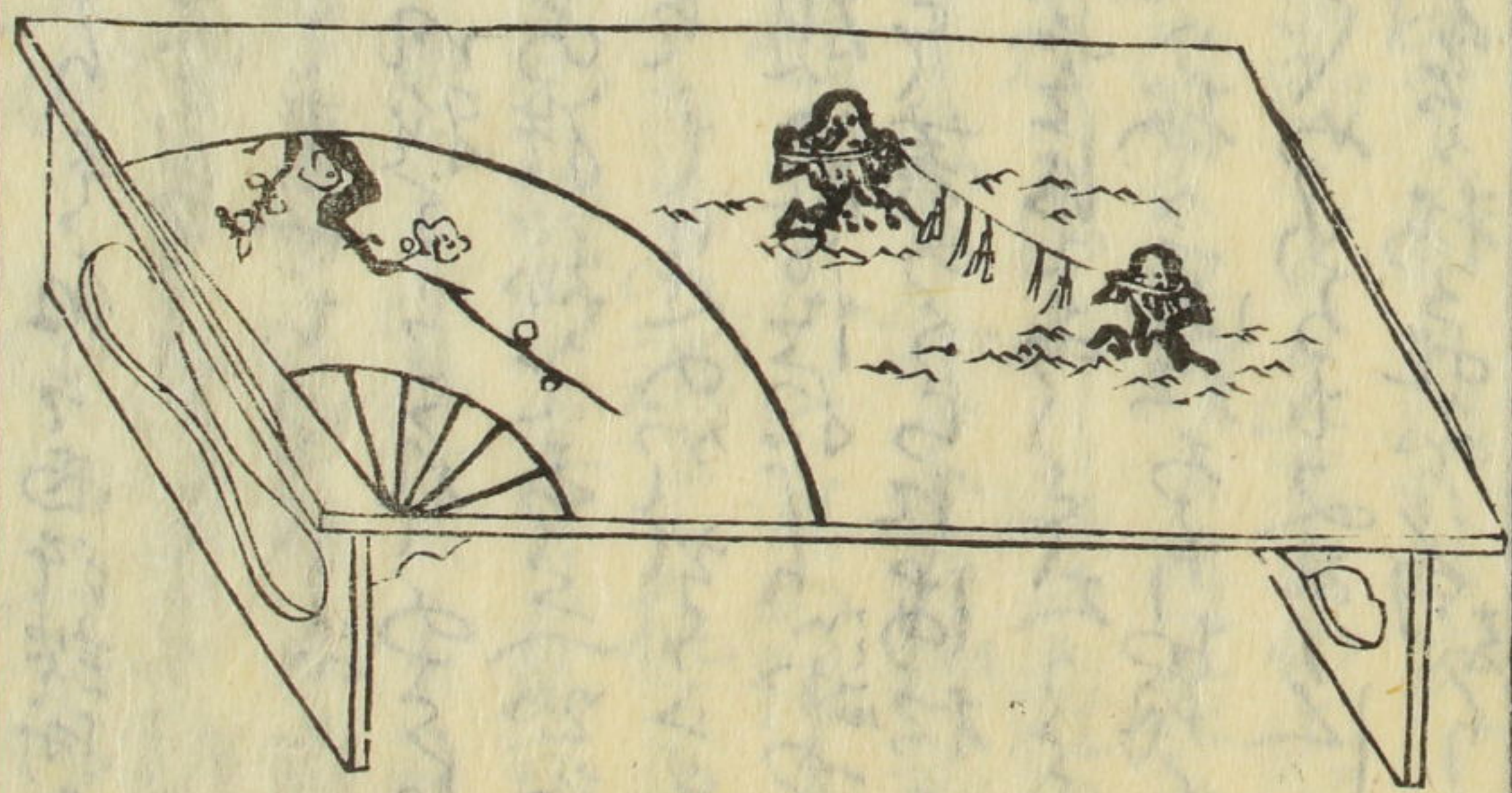
足、たき

足、海氣

埋木ヲ連ニ中ヨリニ
 十口ヨリニ
 フケツケツケ跡先ニ
 中程
 厚四分五厘

足、ひきこ

埋木ヲ連ニ中ヨリニ
 十口ヨリニ
 フケツケツケ跡先ニ
 中程
 厚四分五厘



遠近とつたに但存せんとす書あれとて後の心は
結りし時あれ遠近の心ありて一月花の二條
も四式の雪月花とあれと書らばあはれそは
もなりしそは月花の句とすも句のそは
辨とへしと存せしめて可なるも子向方の一
條とすは月花の可存も分偏なるも約のそは
もは或の例のそはも方にも一かくは不真の
時もあんなるも二條のそはあはれは式とほ
めるべく一書のそは式の書ありもあはれ

傳田

平伝月 遠信秘説より青園の句評の下に祖存
の遺訓とあけて秋を子に月おの詠より伝

とて花二月のそありを訓の大略とむしり
る伝のけりみす約の配りて二花之月の控
あれと大くは二花二月もあはれとす
書らばそのそ向とみ向月はとて七句月
中とて秋とほけ重の七句八句とて又く月秋
とひれは括弧もむしりて花あはれ秋もかり
ちりて書らばそのそ向と書し雜らきり一句
ありりしは秋を子のそ向とて花のそは遠
なる折返りのあはれとて又冬の月もとて
もやたれれも冬のそ向とて又冬の月もとて
のそ向のそ向とて折返りの七句同とて例の
つたのそ向とて決りて是名の月とて

のそ向

傳田

もきし折目の誹諧とくせし温厲も和即も
酸いも耳も隣の談美もす移く今より一節
の要文と辯者の骨切り掠りよ一
大要文 揚子春秋の二對と十論一都の内訖
といひ孔子の十論のこしく春秋の復讐
と用あれし七知我と罪我の會教とはけく
いそくに世間の機嫌とを親ひ達たの禪七十論
のこしく古来の民式と破あしそ種の標伽を
二祖とたてていそる心下の血脈とをたれし
儒仲の秘訣とて多し要と皆との表裏とを
とらんとや畢竟とてけ對の意と親う仲子の
荏弱とこらととていそる心下の血脈とをたれし

い恩愛のあやうとあるとけなす十論も十一
條の要文とあれし論者と對と大口訣といひ
評者と對と大要文といひ辯者と對と
老嫗親切といひ一室民の二子に才之敵あり
変化撮 白馬教誡訓と変化とあるは外はあり
こころ一 虚と實とあれし文とあり撮と一 實と
實とあれし虚とあり撮とあり伊尹といひ
比干といひ上左の事人と天理といひ管仲と
はくありて撮とあるは一伍胥といひて撮
とまよふとありて實と通す方の用とあるは
けなす儒仲の連解もその子對の要と一 通
てけし式とありていそる心下の血脈とをたれし

の要文

の要文

之界一言 先師のたれくの讃は是非段の雅陳
ありと段の詞へ是ちり時いよめく非ちり時
うらうらとてはあかしく儒師の孫とりては兼好
一人の自執あるんしてはては讃の大界をけ對と
作者の者のうして好色の一段よりたれくは
てけさ地とまのへはたれをも非のあかちか
や道の教うててはたれもやうにたれを
天下万民の百もててきても大道の教は
その節とては人ともあかしく是ちり時
うらうらとてはあかしくはたれも一
たれも入道とてはたれと一言の
うらうらとては潜誓のたれあかしく談言微中の

賛はわらうてはたれは儒師のぼき遠とりては
もくうらうてはあかしくはたれも一
うらうらとてはあかしくはたれも一
儒師の大とりてはたれもやうにたれを
かあると仰地の内秘を想とつてはたれも
うらうらとてはあかしくはたれも一
いんたの和とたれとてはたれも一
とてはたれとてはたれとてはたれも一
兼好あるんしてはたれも一
能説とてはたれも一

儒師の

兼好

け道論師 遺稿 夜話 じうじうの儒書し仲孫也
内人の撰集 一はくは唐の末 精のしすゆの地を
釈迦の十才も孔子の十折のしゆくし 徒向とくし之
て行と説く一一人と利をむくもるの道あるも今
顔も人あけきてれうらむむして字をと流さるる
よそりて時の変えし通とて皆き、即好の地梅
ありしららば名の方よりいふ釈のし虚洛とや道
きん乱の場をいふもこれ儒家一交折とや道
偏居の親にしらう一けぬ一子録のし世界の善
焉し復集も互のくの地ある、釈迦の孫のりも
孔子の書も、焉し一の何とていふらあれたる
しをくららるる用あることとある一子字ある

例の二取ちりとて、いふも、くの書人、は、いふ
い説、ら、小見、る、や、と、いふ、ん、と、は、ら、く、撰集
の疑、し、も、と、仰、孫、の、釈、その、の、も、し、や、り、て
太子の抱胎も、今、日、の、人、す、と、も、あ、れ、ん、論、さ、い
應、は、の、も、は、ま、う、て、例、の、撰、を、の、あ、れ、道、一
あ、と、や、儒、書、の、論、孟、の、虚、を、あ、り、い、う、一、の
行、者、達、も、自、撰、化、撰、の、論、あ、れ、し、一、言、は、一、貫、抄
の、説、一、の、い、右、論、者、出、れ、孔子、壁、中、の、言、論
と、齊、論、一、篇、の、増、減、の、傳、字、の、人、に、用、る、用、
て、論、語、と、す、之、前、の、自、撰、と、す、一、の、あ、れ、七、十
二、弟、の、對、向、一、ま、子、の、在、通、可、方、あ、れ、有、子
曾、子、ら、注、り、し、ま、り、子、游、子、其、と、文、字、一

の、注、也、

一、

人より高めてい文章の優劣を述べ遠くして其論
いて其の急用を述べけ儒者より孔子の書
一この箇の眼力ありしより一やや白馬の
又教ふも文章と今日の世に用ゐるもあつて教
識と而世の有用とを述べた人といふは
及れと論するに藤者といふと其の意は
其のたつたといふは其の知不足といふは
小人の抱ふ事とこれいふは其の事のあつた
とをいふやいふ念の非と後念よりあつた
自己とあつたといふと大覚といふは其の事
意あるといふは其の事といふは其の事といふは
一論語一孟子の詞ありとや一撰者の意は

とるを孔子に周制と云ふは其の事
言の及ばし種よりその事とけつり論語とい
くらの過ありて自撰と改のいふは孔子の
韓氏と評のこしく万章公孫と論語と加して例
の似而非ちりあつたといふは其の事といふは
大いねれ其の勝者と自他の撰論といふは其の事
その一末世の儒書も其の事といふは其の事といふは
疑うて其の事といふは其の事といふは其の事
の指業ありと云ふは其の事といふは其の事といふは
孔子のりやあつたといふは其の事といふは其の事
も其の撰者の意ありと云ふは其の事といふは其の事
と云ふは其の撰者の意ありと云ふは其の事といふは其の事

る撰者下

下

とありてその一書と云く古人と信をよむ
言説のやまといふるもまのいふに我々の
書といふも中比の儒佛をも古宗新宗の
の書も歌書軍書の花とてくちの
の十帖もいふも地説と云ふもあま
いふ文よりいふる海内と云ふも
も上臈と云ふも軍書と云ふも
甲陽軍鑑のてきと高坂と云ふも
玄と云ふもつて電お軍の記
いふも天下の七雄といふもあま
自在と云ふも返もくもいふも
と云ふもあまといふも論と云ふも
紙と云ふも

と云ふも我が新家の御船と云ふも
いふもいふもその撰者の藤子と云ふも
者句と云ふもあまいふもあま
於一書一奥の者句と云ふも
二と云ふもあまいふもあま
遺集と云ふもあまいふもあま
いふもいふもいふもいふも
あまいふもいふもいふも
百世の真の度と云ふもいふも
いふもいふもいふもいふも
本家の喩の書と云ふもいふも
いふもいふもいふもいふも

るすか

一書

書林

儒佛の二教とむじむじくくくと談言の微中りて
そと談笑の諷諫ともあるなり
于時享保己歳乙月中院

京寺町押小路橘屋

野田治兵衛



ハ

書目林

儒佛の二教とむじとひくくとと談言の微中として
之と談笑の詠諫ともあるを
于時享子保己歳乙月申院

京寺町押小路橘屋

野田治兵衛

手紙の紙
野田治兵衛
酒原

